潮　流

地域経済や社会の盛衰と疫病

専任研究員　　田代　雅之

二酸化炭素濃度に関わるヒトの営為など待たずとも、太陽や火山などの活動次第で地表の気温などというものはどうしようもなく変動し、その影響も受けて人口も変動する。そうした当たり前の事実を、歴史的な地域の人口動向の中にみる。長いスケールで見れば寒冷地も温暖だったことを、青森の三内丸山遺跡は示している。日本列島は、弥生時代には寒冷化したが、平安時代に至り温暖化したという。エコ社会と評される江戸時代は寒冷化とされるが、飢饉を挟んで気候は変動した。人口変動を招来する気候変動の大勢は人為に先立つ。

人口に変動を起こす要因には疫病もある。「ペスト」「麻疹」「天然痘」「コレラ」「チフス」「結核」「スペイン風邪」「香港風邪」「ポリオ」「エボラ出血熱」「エイズ」「マラリア」「日本脳炎」「SARS」「MERS」等々、有史以来でも人類は大きな疫病に襲われ、国のみならず地域経済や社会の盛衰を招いてきた。日本も「続日本紀」の記述などにもみられるように古代から今日に至るまで様々な疫病に見舞われており、とりまく気候環境、新しい文化の伝来や大陸との往来、諸外国との外交関係、戦乱、都市化等との関連も語られている。

100 年ほど前の 1918 年から 1920 年にかけてのスペイン風邪は極めて多くの死者を出し、諸説あるが世界中で 5 億人が感染し死者数は 5,000 万人ともいわれる。日本での流行は 1918 年 8 月下旬頃から始まり、急速に各県で死亡者が増加して全国に蔓延し、第二波及び第三波に渡る流行を経て収束した。当時の日本の人口の半数の約 2,380 万人が感染し、死者数は 39 万人とも 45 万人とも伝えられる。現在より通信・交通も未発達で分断された状況下、地域の自立的そして自律的な対処が求められただろう。

今回の「新型コロナウィルス禍」への対応の評価は、今後の推移を更に待つ必要がある。医療に関わる産業組織の問題も露わになった。複数年に渡る対策では、新型インフルエンザ等対策特措法に基づき、国の総合調整はあっても具体的な局面では都道府県が権限を行使したが、それは地域住民も含め地域の内発的な力量が分権に足りるか測られる機会ともなった。米国のカリフォルニア州にも満たない国土の構成地域が、地域特性を説いて地域主権や地方分権を唱え、税源や権限の委譲を求めているのだから、自然な成り行きではあったかもしれない。

新型コロナウィルス禍の一方で、世界人口はスペイン風邪の死者数を超えて拡大し続けてもいる。ヒトの思惑を超えて世界は変動を続け、些細な条件次第で地域は勃興も衰退もする。

著名な劇作家の島村抱月はスペイン風邪に急性肺炎を併発して急死した。後を追った島村の愛人で女優の松井須磨子による流行歌「カチューシャの唄」の歌詞の末尾には「ひろい野原を とぼとぼと 独り出て行く（ララ）あすの旅」とある。自然の風雪の中、その自然の一部である人間が辿る未来への旅の行方も、地域経済や社会の行く末も見通し難いが、疫病や気候変動と離れての「あすの旅」は考え難い。疫病や気候変動の猛威に抗う術は個々に高度化しても、付き合い方が拙ければ文明も地域も簡単に破滅に瀕する。過熱しがちな世論を鎮めて、医療や経済等々多岐にわたる状況を総合的に見極めて賢明に疫病に向き合えるか。視線は過去からも未来からも注がれている。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます